第30話

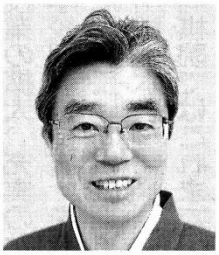
朝日新聞　2014/7/2
(平成26年)7月2日　第2富山　28

朝をひらく

楽しむ・勝つ　意識で差

サッカーW杯

永田 円了
真国寺住職



本田圭佑とネイマールの行動意識には、違いがあった。2人とも日本、ブラジルを代表するサッカープレーヤーである。超一流の技を支える意識の違いが、ゲームの結果に大きな違いをもたらした。

「いつの間にか、お金のためにサッカーをしている自分がいた。本当に大切なものは何だろう」。昨年春ごろから、本田は自問自答を続けていた。単純にサッカーが大好きだった小学生時代、卒業文集に「W杯で優勝する」と書いた。

「僕は父親にほめられた記憶がない。父親が喜ぶ顔が見たかった」。石川県の星稜高校で寮生活を始めるまで父子家庭で育った本田は言った。

一方、ネイマールの表情には、本田がもつ硬さが感じられない。世界が注目するプレッシャーの中、身体が自由に動く。失敗をものともしない。この違いは一体どこから来るものなのか。

ネイマールにも父親の影響があった。「どんなに辛くとも、サッカーを楽しめ」。幼少のネイマールは、この父親のメッセージとともに育った。子どもには、勝たなければならない責任はないが、サッカーを楽しむ責任はある。楽しむ気持ちが、身体の動きをよくするのだ、と教え込まれた。

畢竟、人の動き方には二つの種類があると考える。一つ目は、〝ニンジンとムチ〟。目の前にニンジンをぶら下げ、走るカウボーイと馬の姿。ニンジンというゴールを得ようと目を血走らせる馬。失敗すれば、ムチ（罰）が待っている。一時的にはゴールを得るが、ニンジンはいつまでも前にぶら下がったままなので、当の馬とカウボーイには心の平穏は訪れない。

二つ目は、〝今ここを生きる〟動き。行動の第一義的な目的は、その動きに意識を込めること。その行動を通して達成しようとするものはすべて、二次的なものになる。大切なのは、目的や行動そのものではなく、その元にある意識の状態であると考えるのである。

今この瞬間の成長とは何か。自分の行為、それがたとえどれだけシンプルなものであっても、そこに質の裏打ちがあるということ。人生を点の連続で過ごしたなら、ムチもニンジンも二次的なものとなろう。

「遊於娑婆世界」、この〝娑婆世界を大いに楽しもう〟。法華経の一節がブラジルのグラウンドに鳴り響く。